板橋支部会報八十二号
発行者
東京都退職校長会板橋支部
支部長　小林　和子
発行日
令和三年六月五日

けやき

東京都退職校長会板橋支部会報

巻頭言

コロナ禍の収束を願う

小林　和子

令和二年は新型コロナウイルス対策で終始した一年でした。

私の昨年の日記には、一月三十日に中国で発生した新型肺炎が日本で二人発生し、マスクが売り切れ。二月二十三日には新型コロナ肺炎が世界中に広まり、天皇誕生日の皇居参拝は中止。三月二日には、幼・小・中・高・特別支援学校が一斉休校・・・と書いています。

会員の皆様、お元気ですか。板橋支部でも、総合作品展は中止、令和二年度の総会は開かず総会資料を皆様にお配りしました。計画した活動は幹事会と教育懇話会二回(教育長・小学校校長会長)以外はできませんでした。都退職校長会は一回も支部長会は開かれませんでした。

さて、このような状況の中を皆様はどのように過ごされたでしょうか。

私は、コミック、映画で大人気現象の「鬼滅の刃」がなぜそのように騒がれるのか気になっていましたので、孫から本を借りて読んでみました。少年ジャンプに連載していたものを二十三巻のコミックとして売り出されたものです。

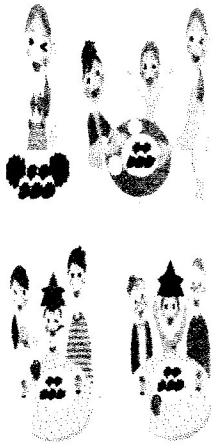
映画を見た人は、「感動した」「涙が止まらない」「嗚咽状態」など感想を話しています。私は、テレビ配信されたものを見ましたが感動するとまではいきませんでした。そして何が見る人の心をこれだけ捉えるのか考えさせられました

この話は、大正時代、炭を売る少年「竈門炭次郎」が鬼に家族を殺され、一人残った妹「禰豆子」も鬼にさせられる。妹を人間に戻し、家族を殺した鬼を討つために旅に出、様々な苦難を乗り越えるという内容です。

今回、この新型コロナウイルス感染の世界的な広がりの中で出現した「鬼滅の刃」は、コロナウイルスを鬼と見てまさに鬼退治するという話とも読めます。鬼退治に頑張る主人公の「折れない心」「立ち上がる力」「自ら鍛錬に鍛錬を重ねる努力」「人を助ける優しさ」・・・が映画を見た人の心を打つのでしょう。そして、鬼ならぬ「コロナウイルス」の一日も早い収束を願っているのでしょう。

今年度、板橋支部では三名の新会員をお迎えしました。まだお会いする機会が持てませんが、板橋支部「けやき会」として、嬉しいニュースです。

会員相互に心を通わせ、希望をもって活動を進めます。皆様もくれぐれも健康に気をつけてお過ごしください。

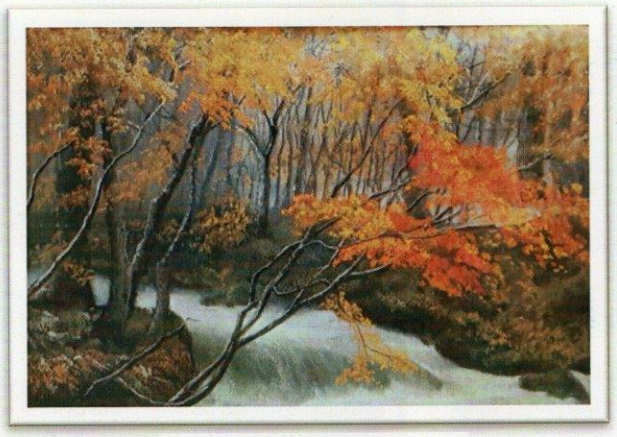


東京都退職校長会板橋支部（けやき会）

令和三年度・紙上総合作品展

発行者
東京都退職校長会
板橋支部長　粂幸子

故・川上喜一先生（十二班）

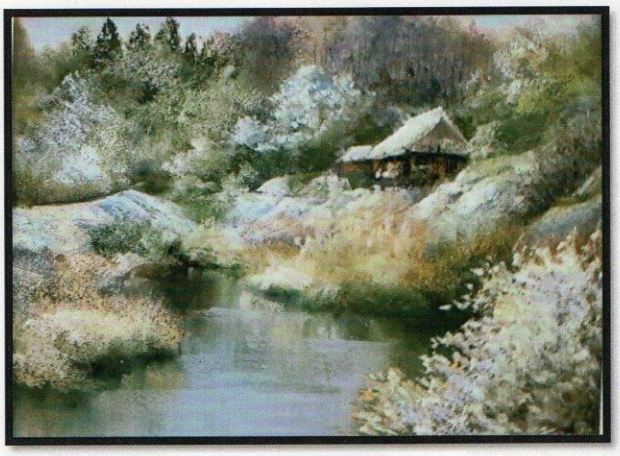


— 奥入瀬の秋 —

父の遺作となった作品

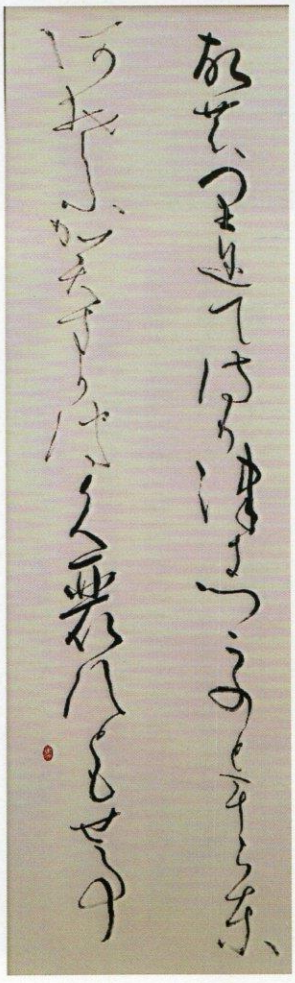
父は、上の絵を描いている途中で亡くなりました。右の二作品は、作品展に出品すると準備をしていた作品です。

父の専門は理数科系ですが、現職の時から多趣味で、絵画の外に書、写真、古文書など、人生を楽しんだようです。九二歳で天寿を全うしました。ありがとうございました。（ご長男より）



— 春待つ日々—

井上英夫先生（十一班）



「この里に手まりつきつき子供らと
遊ぶ春日は暮れずともよし」

毎日新聞社主催の書道展は、毎年七月頃行われます。その組織の中に「会友」という資格があります。年の一回の公募に十回以上入選しますと「会友」となり、翌年以降の公募は必要なく、審査なしで出展されます。わたしは「会友」として毎年出展しています。

今年の毎日書道展の作品は右の良寛さんの句を選びました。

武藤　昇先生（九班）

— 蓮 —

「趣味は結構あるのですが、これと言った作品（？）はありません。最近、「塗り絵」如きものを始めました。下絵を想像しながら描くのです。

この「蓮」の絵は、「京のみやびな文様」を選び、色彩を想像しながら描き上げたものです。